

物故者(令和2年)

さつ ま まさ と (学)
薩 摩 雅 登

8月26日没

ドイツ中世彫刻美術史家であり、東京藝術大学大学美術館の設立・運営、そして学芸員課程教育にかかわった東京藝術大学教授の薩摩雅登は、8月26日に急逝した。63歳。

薩摩は1956(昭和31)年9月28日に東京に生まれる。明治期の音響学者・美術工芸教育者として知られる上原六四郎(1848-1913)は曾祖父、中欧史研究者の薩摩秀登(1959-)は弟にあたる。武蔵高等学校49期生として学んだ後、早稲田大学進学。第1文学部美術史専攻を82年3月に卒業後に大学院文学部研究科西洋美術史専攻に進学(1985年3月修士課程修了、1988年3月博士課程満期退学)。在学中は高橋榮一に師事。サンケイスカラシップ給費留学生(1982年7月~1983年9月)およびドイツ政府給費(DAAD)奨学生(1988年8月~1990年12月)としてヴュルツブルク大学哲学部留学に留学。1991(平成3)年4月より東京都教育庁新美術館建設準備室学芸員就任後、94年10月より東京藝術大学芸術資料館助手に赴任。96年7月に専任講師、97年10月(翌年10月に大学美術館助教授)、2007年より教授となる。

薩摩は学生時代よりドイツ近世美術、とりわけ彫刻家のティルマン・リーメンシュナイダーを研究対象とし、様々な論考・著作を発表しているが、彼の主たる業績は、様々な美術館建設・運営への参画、美術館での様々な展覧会企画、そして学芸員資格課程教育への貢献が挙げられる。東京都教育庁学芸員就任時には、東京都現代美術館の建設およびコレクション構築に関わり、東京藝術大学では大学美術館(1998年設置)建設および運営に奔走し、現在の大学美術館の礎を作った。さらに、森美術館や小金井市はけの森美術館の運営にも関わった。

展覧会企画としては、東京藝術大学大学美術館を中心とした様々な展覧会の実施に関わった。「卒業制作に見る近現代の美術」展(1997年)や「開館記念 芸大美術館所蔵名品展」(1999年)、「柴田是真 明治宮殿の天井画と写生帖」展(2005年)等の大学美術館コレクションにかかる展覧会はもとより、「ウイーン美術史美術館名品展」(2002年)、「エルンスト・バルラハ」展(2006年 第2回西洋美術振興財団賞 学術賞受賞)、等の国際展、「興福寺国宝展」(2004年)、「金刀比羅宮 書院の美」展(2007年)を始めとする古美術展、さらには「日曜美術館30年展」(2006年)や「尊厳の芸術 The Art of Gaman 展」(2012年)等、メディアと連携した展覧会等も手がけた。そして、「日本近代洋画大展」(国立台北教育大学北師美術館)等の国外機関との共同展覧会も担当した。

また、東京藝術大学赴任後は、学芸員課程全般に関わり、講義・実習を通じて多くの学芸員を育てた他、西洋美術史、ドイツ語講読の講義など教育活動にも尽力した。薩摩の様々な活動とともに、彼のオープンかつ芸術を愛する姿勢に魅了された大学、学芸員、そして展覧会事

直前に終戦を迎える。47年、山口経済専門学校卒業。清久鉱業株式会社社長、日本非鉄鉱業社長、またジャパンアートコンサルタンツ社長を歴任する。30代の頃より美術品収集をはじめ、最初のコレクションはベルナール・ビュッフェが愛妻アナベルを描いた「麦わら帽子をかぶる女」で、当初は現代美術、日本画、洋画などあらゆるものを集めていたが、浮世絵に興味が移り、さらに陶磁器のコレクションへと広がっていった。浮世絵のコレクションでは、春信、歌麿、北斎、広重、国芳などの優品、ことに摺りの状態のよいものが含まれているが、中でも葛飾北斎「風流無くてなゝくせ 遠眼鏡絵」は稀少かつ最上の作品として知られる。また中国・朝鮮の陶磁器の収集品のなかでは以前、東京国立博物館に寄託されていた「藍三彩宝相華文三足盤」(唐時代)などが名品として知られる。同氏のコレクション形成のいきさつや事績は、自著『或る美術コレクターの生活』(平凡社、1996年)に詳しい。美術品を盛んに収集していた頃は、まるで餓鬼道の餓鬼のように、コレクションを集めても集めてもさらに欲しくなる状態だったと回想している。美への探究心と執念によって、良質かつ特徴的なコレクションが形成された。

81年には浮世絵商・西楽堂の西斎重らとともに、日本浮世絵商協同組合を創立し、初代理事長となった(1996年まで)。それまで欧米のオークション会社を中心に浮世絵が取引・鑑定されていたのに対して、日本国内で浮世絵の流通が組織的に行われるようになった功績は大きく、その後、日本の国内外での浮世絵の評価が高まることにもつながった。同じく81年には日本浮世絵協会(現、国際浮世絵学会)の常任理事、1991(平成3)年に東洋陶磁学会監事など、要職を歴任した。91年には日本浮世絵協会の内山賞を受賞した。93年には40年にわたり収集・愛蔵してきた浮世絵と東洋陶磁ほか約2400点を山口県に寄贈し、94年には紺綏褒章受章、萩市名誉市民となった。96年に山口県立萩美術館・浦上記念館が開館し、名誉館長に就任し、開館を記念した展覧会図録「蒐集家 浦上敏朗の眼-館藏名品展」(浮世絵版画編、中国・朝鮮陶磁編)が刊行されている。その後も同氏は作品を収集しては寄贈するなど同館の発展に貢献した。2013年には根津美術館で「山口県立萩美術館・浦上記念館名品展 やきものが好き、浮世絵も好き」が開催され、この展覧会に関連して『目の眼』442号に特集記事「はなてばてにみでり」が掲載されている。息子の浦上満は浦上蒼穹堂を営む美術商で、「岐阜県現代陶芸美術館開館15周年記念 浦上父子コレクション展 引き継がれるコレクター魂」展が17年に開催された。三回忌の節目として2022(令和3)年9~11月には「蒐集家浦上敏朗の眼 浮世絵・やきもの名品展」が山口県立萩美術館・浦上記念館で開催された。

〈江村〉

物故者(令和2年)

業関係者は多く、薩摩の死は国内外の関係者を大いに悲しませた。2022(令和4)年秋、大学美術館の「2022 秋の教育資料展示 — 平櫛田中コレクションを中心に」展では、薩摩に関連する資料を紹介する追悼展示が行われた。

なお、彼の関わった業績(展覧会及び著書)は以下の通りである。

主な担当展・巡回展 :

「東京芸術大学所蔵名品展 卒業制作に見る近現代の美術」(1997年)、「芸大美術館所蔵名品展」(1999年)、「日本画の100年」(2000年)、「ウィーン美術史美術館名品展」(2002年)、「ヴィクトリアン・ヌード」展(2003年)、「興福寺国宝展」(2004年)、「厳島神社国宝展」「柴田是真 明治宮殿の天井画と写生帖」(2005年)、「エルнст・バルラハ」展、「ルーヴル美術館展」、「日曜美術館30年展」、「The Wonder Box」(2006年)、「金刀比羅宮 書院の美」(2007年)、「Bauhaus. Experience, dessau」展(2008年)、「尼門跡寺院の世界」展(2009年)、「シャガール ロシア・アヴァンギャルドとの出会い」(2010年)、「尊嚴の芸術 The Art of Gaman 展」(2012年)、「MoNTUE 北師美術館序曲展」(2012年)、国立台北教育大学北師美術館)、「国宝興福寺仏頭展」(2013年)、「観音の里の祈りと暮らし展」、「法隆寺 祈りとかたち」展、「台灣の近代美術」展(2014年)、「武器をアートに—モザンビークにおける平和構築」展(2015年)、「日本近代洋画大展」(2017年、国立台北教育大学北師美術館)、「西郷どん」(2018年)、「あるがままのアート」展(2020年)

主著・論考 :

「ティルマン・リーメンシュナイダーの《聖血祭壇》」(『ヨーロッパ生と死の図像学』(明治大学人文科学研究所叢書)2004年)

『世界美術史アトラス : 創造と伝播 : 紀元前4万年～現代』(監訳) 東洋書林 2008年

「ティルマン・リーメンシュナイダーの《マリア祭壇》」(『祈念像の美術』(ヨーロッパ中世美術論集3)2018年)

(熊澤)

原口典之(美) 8月27日没



廃油やH形鋼、ゴム、ホリウレタン等、工業素材を中心とした様々な物質を素材とし、物質と身体との関係性や現代社会の仕組みを問う作品を制作した原口典之は、8月27日、胃がんにより74歳で死去した。

1946(昭和21)年8月15日、神奈川県横須賀市で生まれる。私立三浦高校では美術部に所属し、横須賀の風景や、のちのテーマに繋がる軍艦等の絵を描いた。顧問の柴田俊一の影響を受けて現代美術に興味を持ち、また鎌倉を拠点として柴田と交友していた歌人の吉野英雄や山崎方代な

どを知る。66年、「ツムー147(貨車)」で第7回現代日本美術展に入選。日本大学芸術学部美術学科在学中より、小林昭夫を中心に横浜に開設された現代美術の私塾であるBゼミに参加。68年、村松画廊で初個展。68年から69年にかけて、米軍の戦闘機の尾翼を原寸大で再現した「A-4 E Sky Hawk」を制作。70年、日本大学芸術学部美術学科卒業。71年からBゼミ講師を務める。同年に制作した鉄製のプールに廃油を満たした「オイル・プール」は、77年に日本人として初めて選出された国際展のドクメンタ6(ドイツ、カッセル)に出品され、世界的な注目を集めた。シドニー・ビエンナーレ(1976年)、パリ青年ビエンナーレ(1977年)、光州ビエンナーレ(1997年、2000年)などの国際展に出品。78年、ギャラリー・アルフレッド・シュメーラ(ドイツ、デュッセルドルフ)で海外における初個展。主な個展に「NORIYUKI HARAGUCHI Elemente der Wahrnehmung. Arbeiten 1963-2001」(レンバッハハウス市立美術館、ドイツ、2001年)。同館より立体作品のカタログレゾネ『CATALOGUE RAISONNÉ 1963-2001』を発行)、「原口典之 — 社会と物質」展(BankARTStudio NYK、2009年)、「wall to wall Noriyuki Haraguchi」(K Contemporary、2020年)。また「戦後文化の軌跡 1945-1955」(日黒区美術館、1995年)、「1970年—物質と知覚 もの派と根源を問う作家たち」(岐阜県美術館、1995年)、「もの派—再考」(国立国際美術館、2005年)、「TOKYO 1955-1970 : 新しい前衛」(ニューヨーク近代美術館、2012年)、「大地の芸術祭 越後妻有 アートトリエンナーレ 2015」(清津倉庫美術館、2015年)等に出品。2017(平成29)年、1977年よりテヘラン現代美術館(イラン)に収蔵されていた「オイル・プール」の修復を行う。最晩年に行われたインタビュー「原口典之のインタビュー 2020 8月『物質から光へ』(企画: 原口典之/小林晴夫、責任編集: 荒木悠、制作: blanclass)によれば、2011年の東日本大震災より前から岩手県北上市臥牛に移住した。

(吉田)

志 郵 匠 子(学) 9月13日没



日本近代美術の研究者で秋田公立美術大学美術教育センター教授の志郵匠子は9月13日に死去した。54歳。

1966(昭和41)年8月1日、広島に生まれる。父はアメリカ史の研究者で広島大学教授の志郵晃佑。86年早稲田大学第一文学部に入学、1992(平成4)年同大学大学院文学研究科芸術学(美術史)専攻修士課程に入学。同大学助教授(1991年より教授)の丹尾安典の指導の下、学部時代にはフランスのジャポニズム、大学院修士では海外の博覧会と日本美術の関係へと関心を広げ、修士論文ではシカゴ・コロンブス万国博覧会(1893年開催)出品の日本美術を研究、これをもとに「1893年シカゴ万博に

印 刷 令和5年10月10日

発 行 令和5年10月31日

日本美術年鑑 ©

令 和 3 年 版

編集者 東京文化財研究所文化財情報資料部

発行者 独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所

東京都台東区上野公園13-43

電話 (03) 3823-2241

製作 中央公論美術出版

東京都千代田区神田神保町1-10-1 IVYビル6F

電話 (03) 5577-4797

出版助成 株式会社 東京美術俱楽部
東京美術商協同組合